

中学校における漢文教育の目的と意義

山戸 俊彦

はじめに

漢文教育について考えるとき、忘れてはならない視点がある。現在、中学校・高等学校での漢文は、古文とともに「古典」として国語科に含まれている。よって、漢文教育を包含する「古典教育」の理解が必要になる。さらには、この「古典教育」を含む「国語科教育（国語教育）」についても、それがどのような性格を持ち、どのような目的があるのか、などを考える必要も生じてくる。つまり、古典教育の中の漢文教育の位置づけ、及び、漢文教育と国語科教育（国語教育）との関係も考え併せる必要があると言える。

漢文は、古文同様、古くから日本人に読み続けられ、日本人の思想形成・精神的な拠り所になっていることは誰も否定できない事実である。つまり、「日本の古典」としての位置づけは既に不動のものである。このように、漢文を古典文学として取り扱い、そこに学習の意義を見出してゆくことは重要である。

本稿は、「古典」の位置づけとしての漢文を否定するものではない。しかし、古典学習の導入段階という高等学校との関連の上からも、「古典としての漢文」ということが強調された結果、本来漢文が備えていながら、漢文教育において軽んじられてしまった面があるのではないかと、ということに着目するものである。その面とは「漢文は国語を習得するうえでも役に立つものである」ということである。

「漢文教育」といえば、高等学校が中心であると考えられがちであるが、実際には中学校段階から「古典」として、古文・漢文の学習指導は行われている。この、初めて「漢文」というものに触れる中学校に焦点を絞ったとき、どのような点に注意して指導をすればよいのだろうか。あるいは漢文教育の意義とは何であろうか。こうした問題を考えるため、本稿では中学校国語科における漢文教育の基礎的研究として、これまでの中学校学習指導要領の変遷と、漢文教育に関するこれまでの論点を整理し、中学校における漢文教材の目的とその可能性について考察しようと思う。

「一」 国語科における漢文の位置

戦後の学習指導要領において、漢文が国語科でどのような位置づけを持つものであるのかを見ると、昭和二十六年度の学習指導要領(試案)までは、「中学校の国語教育は古典の教育から解放されなければならない」(二十二年度試案)、「国語教育を古典に限ることが狭い」

(二十六年度試案)と、古典教育に否定的であったその方針が、昭和三十三年度以降は「古典に対する関心を持たせるように留意する」(三十三年度)というように、「日本の古典」としての価値が見直されるようになった。そして、現在に至るまでその内容にも大きな変化は見られない。平成元年度中学校学習指導要領においても、漢文が国語科に含まれているということは、漢文自身が持っている内容の素晴らしさを学習させることにより、

古典としての古文や漢文を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てるとともに、我が国の文化や伝統について関心を深めるようにすること(平成元年度「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の1の

(6))

という目標を達成することにある。また、それは、

国語を正確に理解し適切に表現する能力を高めるとともに、思考力や創造力を養い言語感覚を豊かにし、

国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。(平成元年度)

ということへと、つながらなくてはならない。

古典教育の意義・必要性に関しては、従来から様々な考えがある。平成元年度の指導要領では、異文化理解の基礎として「日本の文化・伝統の理解とその継承」というものが強調されている。「文化・伝統の継承」とは、過去から受け継がれてきた日本の文化(特に言語文化)に対する深い認識と敬愛の心を育てるということである。

これは敗戦後、日本民族が優れた文学遺産を持っていることに喜びと誇りを感じさせ、「生徒たちに祖国に対する愛情と民族的自覚をめざめさせること」(荒木繁著「古典教育の課題」(「民族教育としての古典教育」の再検討)、「日本文学」一七号、未来社、一九六八年)六一頁)というような、「民族教育としての古典教育」という考え方となって現れてくる。この考え方が古典教育の進む方向に大きな影響を与えたのである。

戦後の学習指導要領に数回に渡り携わってきた飛田多喜雄氏も、古典とは、

古典に身をたっぷり浸すことによって、昔の人のものの見方や考え方、生き方に触れ、自らの魂を清め、自己形成に資することにある。

(飛田多喜雄著「理解教育の理論(国語科教育方法大系5)」(明治図書、一九八四年)一九三頁)

としている。飛田多喜雄氏によると、「古典」とは生活の価値・文化的価値・芸術的価値を備えたものであり、価値観が多様化する現代において、昔から誰もが認めてきた一つの確固たる価値観を備えているものであるとする。こうした本質を持つ古典に浸ることは、誰もが認めざるゆえに価値観を備えた自己を確立していくことになるというのである。

この「自己形成に資する」ためにも、「日本の文化・伝統の理解とその継承」が漢文教育の一つの意義になる。中学校における「古典としての古文・漢文を理解する」というのは、高等学校における訓詁注釈的な読解や、形式的な解釈ではなく、一応内容がわかるというほどの意味であり、中学校の古典指導は全体的な入門指導であって、「読解」というよりも「読み味わう」という「鑑賞」に主眼が置かれる必要があるということである。つまり、古典に対する興味・関心を育て、基礎的理解をさせるところにねらいがあると言える。

古典が中学校においても必要であるとされるのは、それ自身が備えている内容によって、「古典」たりうる価値を保証したものであり、その価値ある内容を持った古典を理解させることにより、日本の文化・伝統を理解させるとともに、生徒自身の精神的成長に役立つものになるとする。戦後、漢文は旧思想を残すものとして、教育の世界から消えかけたことがある。そのため、漢文

は「日本の古典」であることが強調された。現在では、国際社会における異文化理解の基礎として、まずは自国の文化・伝統を理解する必要があるとする。これにより、漢文も古典として、その地位を確固たるものにできたと言える。

一方、漢文は「漢字」という文字で書かれていながら、国語の語順とは全く異なる。こうした特徴をはじめとして、現在まで残っている漢文的な要素との関わりに触れることは、国語への関心を高めていくとともに、日本語を使う上でその感覚を磨いていくことになるのではないか。すなわち、「国語の習得にも役立つ」という側面を考え併せていくことも必要であると言える。

〔二〕 「言語感覚の錬磨」という側面

漢文は、国語の教材として国語科の目標を達成していくために存在するものであるという側面を持つ。例えば、わが国の言語・文章・思想と関係の深い漢文を読んで、自然や人生に対する感情・思想をとらえ、人生を豊かにする態度を育てる。(増淵恒吉著『増淵恒吉国語教育論集(上巻) 古典教育論』(有精堂出版、一九八一年)三頁)

というとき、「自然や人生に対する感情・思想をとらえ」るような内容を理解するために必要な解釈、即ち古典を

鑑賞するための導入や過程において「我が国の言語・文章」と「漢文」とは、どのような関係にあるかということと、また同じ漢字が使用されていながら語順が異なる漢文に触れることによって、国語の特質というものに気付かせること、さらには現在も国語の中で重要な役割を持っている漢字・漢語などの意味や成り立ちなどの理解に役立つような学習を行っていくこと、などが「言語感覚を錬磨する」ということになる。

漢文の学習における、この「言語感覚の錬磨」とは、漢文を読む上で必要な能力を養うといった基本的なことから、

漢字・漢語について正確な知識を得たり、論理的な文章構成法を学んだりして、言語生活に役立てる。

(増淵前掲書三頁)

というような、漢文の学習を通して国語の力を伸ばすという場合にまで関係してくるものなのである。また、このことは「文化・伝統の理解とその継承」という古典としての漢文というものを理解させるための前提にもなる基礎的なものと考えることができると。

漢文教育における、この「言語感覚の錬磨」という面を強調していたのが長澤規矩也氏である。長澤規矩也氏は、昭和二十五年九月二十五日に学友社から『国語学習中の漢文学習指導』という本を出版している。この書は、戦後の教育課程編成における中学校・高等学校の漢文学

習の意義や目標、漢文教材に関することなど、漢文教育の理論をまとめたものである。

長澤規矩也氏自身は、この書が昭和二十六年度学習指導要領の第七章「国語科における漢文の学習指導」の内容をより詳しく理解するためのものである、と語っている。このことは、当時の漢文教育に長澤氏の意見が大きな影響力を持っていたことをよく表している。

長澤規矩也氏はこのなかで、中学校では「漢文的な学習」という位置づけになる、として次のように述べている。

今日の漢文学習の意義はいろいろあるが、その中心となることは、国語のなかに溶け込んでいる漢文的要素を十二分に理解し、国語の使用に一そう効果を与えることにある。(中略)漢文は、その中に含まれている漢字漢語が、わが国語の発達に非常に大きい影響を与えて来た(中略)。故に、わが国の言語や文学のみならず、広く一般文化を正しく理解し、評価するために、漢文学習は重大な意義をもつ。しかも、過去の古典ばかりではない。今日の国語の中にも、文字・語彙・文法・文章・文体などに多くの漢文的要素が生きていて、これらの漢文的要素を現代語の中から取り除くと、わが現代語は完全に成立しなくなるから、これらの漢文的学習を無視すれば、国語学習が完全には成立しなくなる。現代文学の内容に

も、時には漢文の内容が取扱われる。故に、現代語をよく使いこなすために、漢文学習は大いに役立つのである。(長澤規矩也著『長澤規矩也著作集(第八卷)地誌研究 漢文教育』(汲古書院、一九八四年 三六二頁))

とする。これは、漢文教材の本来の目的である内容の理解を無視したり、漢文の学習がなければ国語の学習が成り立たないということではなく、漢文教材が備えている性質として、それは国語の力を身につけるうえでも役立つものであり、中学校段階においても非常に重要なものであるということを確認しているのである。

そしてさらに、(一)漢文や漢文体の和漢混合文や漢文口調の文章が日本では古くから文語体の一種として書かれて、その主なものは日本の重要な古典となっていること、(二)日本語は古来、あらゆる方面で漢文と本質的な関係を持ち、我々が日常使っている国語の中にも漢文的要素はかなり多量に含まれていること、(三)漢字漢語漢文が持つ、厳肅・強力・簡潔な特性を利用して、あらたまった表現や力強い表現、ひきしまった表現などをするとときに漢文的要素を応用すること、(四)これらのためには、漢字漢語のもつ意味や特性を十分に理解する手段として、漢文学習が国語学習中において欠くべからざるものになる、などを理解させることがその目標になる、と長澤規矩也氏は言う。

長澤氏も、飛田多喜雄氏などと同じく、

漢文は古くから訓読によって国語化して読まれ、その主なものはわが国の重要な古典となっている。その中には日本の古典よりも普及して広く個人に愛読されたものがある。ゆえに漢文の構造が我々の言語生活の中に広く入ってきているのみならず、その内容は我々の精神生活の中に深く溶け込んでいく。世界的な古典の一つとして重要性を有することに加え、我々にとっては外国の古典としてではなく、自国の古典の一種としての性質を持つものであるから、普通教育の中で重要な学習的意義を持つのである。」

(長澤前掲書三六三・三六四頁)

ということを第一義的な立場としている。これは「文化・伝統の理解とその継承」ということを言い換えたものと考えることができる。そして、これに言語感覚を磨く材料という面を加えて漢文を扱おうとするのである。

この他に、鎌田正氏・大木春基氏・江連隆氏など多くの人物が、漢文教育における「言語感覚の錬磨」の重要性を説いている。いずれもの「文化・伝統の理解とその継承」という目標に加える形で、

漢字・漢語の学習や簡潔な文体の習得が漢文の学習によってなされということである。(中略)漢字の制限や翻訳文などの影響から、現代の文章は実に冗長に流れる傾向にあり、時にはその長所も認められる

が、一般の文章としては、なるべく簡潔なことばで意を尽くすことが望ましい。これには漢文の学習が大いに効果があるということは誰しも異論がないであろう。(鎌田正著「中学校に於ける漢文教育の現状と問題点」(「斯文」第十八号(斯文会、一九五七年)六二頁)

ということ、及び、

不慣れた漢語を正しく身につけさせること、その他めには、現在とかくおろそかにされていることではあるが、漢語の構成に対してのおおよそそのまわりを理解させることも必要な学習となるであろう。

(大木春基著「中学校の漢文学習について(指導書の解説に即して)」「漢文教室 四六」(大修館書店、一九六〇年)一五頁)

などとして、長澤規矩也氏の考えを継承・発展させている。このような「言語感覚の錬磨」に役立つ漢文の学習というものを、江連隆氏は「メンタルアプローチとしての語学」という言葉で表している。つまり、古典の文章を現代語に翻訳する過程(読解の過程)における現代語と古語との比較・異同を学習することによって、言語感覚が錬磨されるというのである。江連隆氏は、外国語教育という面から漢文を考えており、漢文を翻訳する場合は、「役に立つ外国語」という実用的目的を重んじる外国語教育、つまり「正則語学」であるのではなく、

頭脳の訓練を目ざす語学教育、外国語に含まれる思考・文化を学びとる語学教育(江連隆著「漢文教育の理論と実践」(一九八四年、大修館書店)五四頁)であるとす。これも、漢文を読解するときに養われる言語感覚の面を意識したものであると言える。

〔三〕 国語の教材としての漢文

漢文における「言語感覚の錬磨」すなわち、国語の力を身に付けていく上で、何よりも関係することは、漢字・漢語である。学習指導要領は、昭和二十二年に「試案」として最初のものが作成されてから、現在に至るまで五回の改訂が行われた。この五回にわたって改訂されてきた中学校学習指導要領の中で、漢字や漢語については、昭和四十四年度で「ことばに関する事項」に位置づけられ、昭和五十二年以降は「言語事項」として「表現」「理解」の領域に並ぶものになった。一方、昭和二十六年学習指導要領では、漢文の学習は、漢字・漢語、及び文章表現などにおいても役に立つもの、つまり「国語の力を向上させるもの」としても有効であるということが強調されていた。現在では、「興味・関心を持たせる」ことから内容の素晴らしさを通して、生徒のものの見方や考え方を養っていくという面が強調されるようになり、漢文教育のもう一つの側面である、国語力を向上させる

面、すなわち「言語感覚の錬磨」という面がほとんどなくなった。それでも昭和三十三年年度では、第3学年の

「2内容 B(1)ウ」を解説した指導書に、

第3学年のウの「国語の特質とその問題点に触れる」とは、(中略)また、国語の特質や問題点のすべてにわたって指導するというわけではない。いわゆる漢文の読解の指導や外国語の指導などと結びつけて、その場合に応じてことばの順序が違う、語形変化のしかたが違う・・・

とあり、ここでは明らかに国語の力をつけるために「漢文」が役に立つことを指摘する。

昭和四十四年度中学校学習指導要領では、「第2各学年の目標及び内容」の「D.ことばに関する事項(2)」の「ウ」を解説した指導書に、

ウの「語句の組み立て」は、複合語、接辞のついた語、慣用語などの問題である。和語や漢語の組み立ても、理解と使用を正しくするために、概要に触れるのは有効である。

とある。

また、昭和五十二年度以降は、その内容が「表現・理解・言語事項」とされ、漢字・漢語などは「言語事項」の領域に含まれる。この「言語事項」の領域は、それ自体独立したのではなく、表現・理解の分野と関連させることが要求されるものである。昭和五十二年度の「言

語事項」の(1)ウ・オを解説した指導書によると、

漢語の構成に関しても、理解を深めて正しく使用するために、その概要に触れるのは有効である。

というように、昭和四十四年度同様、漢語の構成については、その「概要に触れる」際に、漢文と関連させた学習指導を行うことができるとする。

さらに、平成元年度においても「第3章 指導計画の作成と内容の取扱い2(1)」を解説した指導書によると、

これは、言葉の性質の類似性や系統性などについて、生徒の興味や学習の必要に応じ、ある程度体系付けてまとまった知識を得させるような指導もできる、ということを示したものである。

としている。ここでも、「国語の特質を理解させる」という表現から、漢文と漢字・漢語などが関わることは考えられるが、直接漢文を利用することについては言及されていない。

漢文教育において、こうした面が薄れてきた理由としては、「言語感覚の錬磨」ということが内容理解のために漢文を書き下し、一字一字辞書を調べて現代語にするという知識詰め込み型の学習と混同され、漢文の学習を技術主義的な瘦せたものにするのではないかと受け取られたことによる。また、この知識詰め込み型の学習は、戦前の国語教室の体質を想起させることにもなり、敬遠されたのである。したがって、長澤規矩也氏らが指摘し

たような入門期における国語習得に役立つ漢文という側面、つまり「言語感覚の錬磨」という面は、現在中学校における漢文の学習で十分に成されていない。

漢文を訓読する過程において日本語化した漢語、または漢語の形式に倣って作られた新しい語をも含めて、「漢語」というものは過去から連続と受け継がれ、現在も使用されている言葉である。従って、これは単なる語句の指導というだけではなく、過去から伝えられてきた言語の文化・伝統を継承することになる。漢文は素晴らしい内容を持つだけではなく、その文字が意味や形の変化はあれ、現在も受け継がれている。この点が国語科の目標を達成していくための「言語感覚の錬磨に役立つ漢文教育」と言えるのである。

中学校が漢文教育の入門段階であることを考えたとき、漢文学習が国語の力につながる点を考慮することは、国語の特質を知る上でも、また本格的に漢文を読解・鑑賞するための興味・関心付けの段階においても大切である。始めに述べたように、漢文教材は、漢文の内容が持つ素晴らしいさを理解させるといふ面と、国語科として国語の力をつけるための使命を背負った教材であるという側面を持つものである。これらの意義に関して、特に「言語感覚の錬磨」とは、「漢文を通して、どのような国語の力を鍛えるのか？」と言い換えることができる。この面は、国語科の目標である、国語を尊重するような態度を

育てる学習に役立つものである。具体的には、漢文を現代語に翻訳する過程（読解の過程）における、現代語と古語とを比較したりその異同を調べたり、漢字・漢語の成り立ちやその構成などを指す。

日本の書き言葉には「漢文」の系統が色濃く存在していることは多くの学者が指摘するところである。漢文の文章が訓読されるようになり、次第にそれが日本語に取り入れられてゆく過程において、そのままの形で取り入れられた要素が「漢語」である。それは、現代から見ると、時代を経るにつれて意味が変化したものもあるだろうが、人々の言葉として伝えられてきた日本語としての歴史がある。また、漢語の形式に倣って新しい日本語の語彙を作っていった過程をも含めて、漢語はすでに日本語として重要な位置を持つものであることがわかる。

学習指導要領を見る限り、現在はこの「国語の力を鍛える」という面が軽視されすぎている。よって、「文化・伝統の理解とその継承」を確かなものにするために、漢文を「国語の教材」として、もっと利用しても良いのではないだろうか。古典教育は、内容理解により古人のものの見方や考え方を通して生徒の人格形成に資することが中心である。しかし、こうした学習を確かなものにするためにも、やはり漢文を理解するための基礎的な知識をある程度理解させることが先行する。ここで言う「基礎的な知識」とは、国語の力をつけることにおいて

も有効なものとして働けるように考慮されたものでなければならぬ。それを漢字・漢語の学習と近づけて考えるのである。このためにも入門期である中学校において、「漢文」と国語の語彙である漢語との関係を取り上げることは、有効だと言えるのである。

漢文訓読のリズムは現在にも言葉の端々に見られる。また、漢語の構成などを見ても、漢文との関わりは見えてとれる。漢文教育の入門段階としても、このような表現に引っかかりを持つことは必要である。なぜ、漢語を使用することが引き締まった表現となるのか、漢字の特徴を理解することによって、どのような利点があるのか、これらの学習を語彙指導の時間だけでなく、漢文の時間においても行えば、有益なものとなるのではないだろうか。また、漢語の構成などを漢文の学習における入門段階に学習することは、書き下し文と現在の言葉とを比較して、その難解なことを理解し、現在使用している言葉の特質に気付かせることができるように思われる。

この点を考えると、漢字・漢語の学習も「古典教育」の一つになり、そこには漢文教育の役割をもう一度重視する必要がある。また、この意義に照らし合わせるとき、漢文は中国の古典でありながら、日本の古典であるという二面性をもつことが許されるのである。つまり、漢文を学習するうえで日本語の伝統を理解するということが、及び漢文の構成要素である漢字・漢語が、日本

語として過去から現在においてどのような働きをしてきたのかということ、などを理解することも漢文の学習として考えることができるのである。

中学校段階においては、本格的な漢文教育への入門段階として興味・関心をもたせるためにも、現代語とつながり深く、抵抗感が少ない漢字・漢語を漢文学習の導入として取り入れることが効果的である。現在使用している漢語の意味と、その出典における意味の異同を考えさせることは、言語文化の伝統について関心を深めるようになるだろう。また、漢語の構成を生徒に理解させることは、漢字のそれぞれの働き、つまり漢字の品詞性を理解させることであり、漢文を学習する上での予備学習としても有効なものである。こうした学習により、はじめに漢文に触れる際にも、その抵抗感を減らすことができる。さらには、漢字が古代中国や過去の日本においてどのように取り入れられて使用されてきたかを理解させる「古典教育」としても、漢文は中学校から学習する価値がある。このように見ると、漢文教育において漢字・漢語の成り立ちやその出典を知ることが考慮した学習は「国語を尊重する態度を育てる」ことを考えたとき、必須のものと言えるのである。

結び

中学校における漢文の学習は、古典教育の入門段階として、興味・関心を持たせ理解する基礎を養うという側面と、国語を使う力を高めるために役立つ、という側面を持つ教材でなければならぬ。本稿では、漢文を古典教育の一環としてのみ考えるのではなく、国語の能力を向上させる教材としても役立たせることを考えてきた。

漢文は、その内容が日本人の精神基盤を形成するのに貢献してきただけでなく、「漢字・漢語」の源泉として、日本語に強く影響を及ぼしてきたものであることから、特に中学校では国語における「漢語」という領域に関連させて、漢文学習の入門段階の教材と、国語の力をつける教材とを兼ね備えたものを考える必要があるということがわかった。日本語の中で漢語が占めている位置は大きなものである。したがって、「漢語」と漢文との関係を十分に理解することは非常に重要なものになる。本稿では、このような漢文の側面を、「言語感覚の錬磨」という言葉で表現し、漢文が国語を習得する中で、ゆるがせにできない優れた教材性を持つものであることを、明確にしたものである。

今後の課題としては、授業実践を通して、本稿の立場

に基づいた漢文学習を積極的に取り入れていき、指導理論を確たるものにする事、及びそのための教材精選化を図っていくことである。

〈参考文献〉

- 阿部吉雄「古典教育の方向（漢文）」（『国文学（解釈と教材の研究）』（学燈社、一九六一年一月臨時増刊号）
- 大木春基「漢文指導における漢語意識の問題」（『漢文教室 四二二』（大修館書店、一九五九年）
- 鈴木二千六「中学校古典教育の展開（中学校戦後「古典教育」の出發）」（『東京学芸大学紀要（人文学科）』四二、一九九一年）
- 長尾高明「古典指導の方法」（有精堂出版、一九九〇年）
- 浜本純逸編集・解説『時枝誠記（現代国語教育論集成）』（明治図書、一九八九年）
- 飛田多喜雄「国語学力論と教材研究法（国語科教育方法論大系 2）」（明治図書、一九八四年）
- 増淵恒吉「増淵恒吉国語教育論集（上巻 古典教育論）」（有精堂出版、一九八一年）
- 南本義一「中学校における漢文教育（一）（漢文教育研究三）」（『岡山大学教育学部研究集録』六三、一九八三年）